

就テ) などが挙げられている。11ページには、Fisher 氏の野戦歯科療法について、野戦における歯髄失活法について、また、軍陣歯科における歯髄の切断術についてなどの記載があるがどのような特色のある治療法であったのであろうか。本書は、全体として教科書というよりは講義の指針を示した小冊子といえるものとなっていた。

7) 軍陣歯科学 (第2報)

—満州事変における歯科巡回診療時
携行材料に就て—

The Military Dentistry (2nd Report)
—On the Dental Materials of traveling
Dental Examination at the Manchurian
incident—

日本大学松戸歯学部 ○馬渡 亮司
大石 和久
吉田 和子
鈴木 邦夫
谷津 三雄

Ryoji Mawatari, Kazuhisa Ohishi, Kazuko
Yoshida, Kunio Suzuki, Mitsuo Yatsu, Nihon
University School of Dentistry at Matsudo

川又俊夫(陸軍軍医学校口腔外科、主任松本秀治教官)が「軍陣歯科の回顧—厚生歯科学會、昭和16年総会講演要旨—各戦役に於ける我が軍陣歯科の変遷」において「昭和6年満州事変の勃発となった、事変当初にあっては派遣各大部隊に衛生班が編成せられ、これに歯科医一乃至二配属となり、歯科医は衛生班主力と行動を共にし各地に診療所を開設し又単独にて遠隔の各部隊に出張或は巡回診療を行った。次いで現地に陸軍病院開設せらるるや歯科医の採用配属となり或は衛生班付歯科医の転属となって全満全軍の歯科診療に遺憾なからしむるに至った。歯科用衛生材料に就ては、衛生班は歯科医を携行し、開設の陸軍病院は病院用歯科器械を備付けた。各地部隊へ出張、巡回診療には馬車、汽車、船舶、飛行機等あらゆる交

通機関を利用し、護衛を付け時には単独にて分散せる各地の部隊に行動せり随って行動に便なる様携行器械の重量及容積に最小限の制限が行はれる。治療椅子は出張、巡回診療時には携行用難にして現地に於て椅子等を適当に改造し或は支那料理髪椅子を利用した。尚、治療椅子は普通椅子に安頭台を考案付着して使用せり。又、支那料理髪椅子の利用も便利なり、抜歯には普通の寝台を利用したり」と報告している。

そこで、陸軍歯科医加藤敏夫が昭和8年7月19日ハルピン衛戍病院ニ於テ第十師団衛生班付「歯科巡回診療時携行材料ニツイテ」という謄写版刷り10ページを参考資料として最も苦勞したであろう戦地における 歯科治療椅子 の製作方法が ABC の三図で図解されている。Aハ歯科医 内容、穿盤器ヲ分解シテククリ付ケ置ク。木具ヲ応用シテ治療椅子トセルモノナリ。予メ頭部ノ安定トナルヨウ加工シ置ク方便ナラント思考ス。B図ノモノヘA図ノ場合ヨリ椅子ノ小ナルモノニシテ支柱ニテ椅子ノ転倒スルヲ防グ。C図ノ場合ハ椅子ノナキ場合ニ治療台トセン時ノモノニシテ横木ニ枕ヲ結び付ケ安頭台トシ丸腰掛ヲ椅子トセリと解説されている。また携行治療機器として 1. 歯科用穿盤器一具、注意 前述ノ如ク穿盤器ククリ付ケノ木具ハ椅子ニククリ付ケ安頭台ニ利用シ得ル如ク工夫スレバ 便利ナリ、2. 治療器機及消耗品、3. 薬品及消耗品、4. 救急用繃帯材料一揃とあり「右ヲ一個ノ(トランク)ニ納入シ得ル如ク工夫スレバ便利ナリ。尚戦時ニアリテワ第一戦部隊ノ巡回時ハ如何ナル変事ニ相遇スルヤモ知レズ一旦急ニ望マバ歯科医モ又負傷者ノ治療ニ任セザルベカラズ。余モ亦實際ニ此ノ事ヲ痛感セル事シバシバアリ、依テ歯科医出張時ハ要スレバ軍医携帶囊或ハ之ニ代ワルベキモノ携行セシムルモ徒事ナラズト思考ス。其他私物トシテ適宜携行スルヲ要スルモ出張日数ニ応ジ最小限度ニ止ムル事肝要ナリ。以上ノ携行材料ヲ見ルニ、一見スル時ハ目的地ノ医務室備付物品ヲ使用スレバ事足り携行ノ必要ナキ如ク考ヘラルルモ實際ニ於テハ、討伐ニ出動シ何等材料ノナキ場合アリ、亦隊ノ移動ノ直後等ニ於テハ僅カニ看護兵一名ノミ残留セル場合等アリ

余モ亦不足品ヲ急遽追送セシメタル事モアレバ齒科診療巡回ノ際ハ独立シテ勤務シ得ル如ク用意シ置クハ万全ノ策ナランカト考フ」で終わっている。

本書は、巡回診療の携行材料について戦時において材料、器具、容積、重量が制限されるなかで、いかにして携行するかを具体的に示しており、治療椅子の製作の苦労がしのばれる。

以上、軍人歯学（第2報）—満州事変における齒科巡回診療時携行材料に就いて—について報告した。

8) 軍陣歯科学（第3報）

—戦傷治療上における歯科技術の応用—

The Military Dentistry (3rd Report)

—The Application of Dental Technique to the Medical Treatment of the War Wounded—

日本大学松戸歯学部 ○山口 秀紀
吉田 直人
野口 隆司
岸 孝光
谷津 三雄

Hidenori Yamaguchi, Naoto Yoshida, Takashi Noguchi, Takamitsu Kishi, Mitsuo Yatsu, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

松本秀治軍医中佐は昭和13年4月井上日英軍医少佐の転出に伴い第4代目口腔外科教官となり昭和18年までその主任をつとめた。

上野正著『続々いわでもかな—老いの語り』（昭和63年6月刊）の「中村平蔵先生を偲ぶ」の(6)顎顔面戦傷治療への貢献の項(28~29ページ)に「昭和12年7月、日華事変勃発、顎顔面戦傷患者が多数発生。悲惨な戦傷患者が芝浦海岸より若松町の各領域ごとの専門治療病院である臨時東京第一陸軍病院に送られてきたのである。当時の陸軍での顎戦傷患者の治療は、第一病院第二十外科病棟(200床)に収容され、手術の順番に従って、

隣接する陸軍軍医学校口腔外科の病棟(約35床と記憶する)に移され手術は同口腔外科の手術室において行われることになっていた…筆者(上野教授)も昭和15年8月より昭和17年6月まで第一陸軍病院付医官として第二十外科病棟を管理するとともに、となりの軍医学校口腔外科で手術するという好運に恵まれた」

また「松本秀治先生と陸軍軍医学校」の項の42ページに「囑託の中村平蔵先生の手術の助手もつとめ、そのうち単独手術を許され、多数の重症顎戦傷の形成外科手術症例を重ねることが出来た…手術のほか、毎日の包帯交換は、熟達の佐藤正一郎技官に教わりながら、二、三十名あるいはそれ以上いたかも知れない多数の患者を並ばせておいて二人ですませた。なお、手術前後の患者約三十数名は、常時軍医学校病棟に収容されており、他に骨移植手術後の経過観察中の患者二、三十名は東京月島の臨時病棟および伊豆川奈ホテルに収容されていたから、顎戦傷患者は常時総計約三百名はいたであろう」と記載されている。そこで佐藤正一郎先生(前武蔵野日赤病院副院長)が大切に保存されていた昭和17年第二十二期乙種学生、記念講演並台覧品を参考資料とし、当時の顎戦傷患者の写真から軍陣歯学史の一端とすべく報告した。

なお、今回用いた資料は、第13回日本歯科医学会総会(中原実会頭)における歯科歴史展(昭和48年9月23、24日)に展示したものである。

「戦傷治療上ニ於ケル歯科技術ノ応用ニ就テ」と題し陸軍軍医大尉池田敏之が講演を行っている。このなかから二・三を摘録すれば、「先ヅ口腔付近ノ戦傷ハ多クノ場合顎骨ノ損傷ヲ伴ヒ其ノ結果屢々齒列ノ不正ヲ来シマス 齒列ノ不正ハ僅カ数耗ト雖モ口腔機能ノ最モ重要ナル咀嚼ヲ妨グルニ至リマスルノデ顎骨ノ整復ハ一般骨折治療以上ニ厳密ニ致サネバナリマセン 之ガ為先ヅ第一線ニ於キマシテハ受傷後可ク速カニ副木ニ依ル顎骨ノ整復ト固定トヲ必要ト致シマス 而シテ比等ニ用キマス副木ハ一般骨折ニ用ウル副木ト稍々趣ヲ異ニシマシテ其ノ装着ハ歯科技術ニ依ラネバナラヌノデアリマス 軍ニ於キマシテハ第一線